

小学校

日支事変（日中戦争）当時、私は小学2年生だったが、勝った勝ったと、大人たちは皆浮かれたように旗行列や提灯行列をやっていた。お兄さんのような人が毎日のように戦地へ万歳で送られていった。4年生の時からお店からまずお菓子が消えた。学校では朝礼の時、全校生徒が宮城の方を向いて遙拝をし、教室にある神棚を拜んでから授業が始まる。

日本は万世一系の天皇を頂いている神の国、いざとなれば神風が吹いて助けてくれる。天皇は神の国から使わされてきた生き神様だ。国民は天皇の赤子。だから男子は大きくなったら天皇のために兵隊になって死ぬのだ。子ども心に女でよかったと思った。

店から品物が消え、何から何まで配給制になって不自由になった。靴下も手袋も草履も自分で編んだ。「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に、はだしで薙刀の練習をし、冬にオーバーなしで登校。毎日慰問袋をつくり、校内を長靴をはいた将校が勝手に歩き回り監視しているように思えた。いいこともあった。時間が足りなくて、読み書きソロバンだけはきちんとやってくれたような気がする。習字では書き順、国語では大きく群読、日本の発音が身に付き、ソロバンでは十進法。6年には3桁の暗算が楽にできるようになった。戦後分かったことは、歴史だけは嘘が多くてショックだった。忘れられないのは、習字の時、半紙がなくて新聞紙を代わりにしていたが、天皇の写真が載った新聞に字を書きしてしまった子が、先生にくどくどいつまでも叱られていたこと。すごく厭だったことを覚えていて、だんだん戦争がいやになっていった。誰に教えてもらったのか、歌詞の意味もよく分からずに、軍歌をよく歌った。

小学5年生の12月8日、朝から軍艦マーチが鳴り響き、何とも言えぬ雰囲気には私は圧倒された。登校の道々、まちは軍艦マーチがあふれていた。学校も、先生方は忙しそうに興奮しているように見えた。朝礼で、戦争が始まったこと、飛行兵がアメリカの軍艦に体当たりし軍神と讃えられたこと、海戦の戦果が誇らしげに発表になり、軍神に黙とう、天皇陛下万歳でやっと教室にはいることができた。日本は神の国、鬼畜米英を必ずやっつけるまで戦う。その時、私は、あんな大きな国を相手に勝てるわけが無いように思えた。（誰にも言えないが）

女学校

私が入った女学校は割合自由な雰囲気、奉安殿も二宮金次郎も玄関にはなかったので、登下校の時いちいち敬礼しなくていいので助かった。それでも防空訓練や慰問袋はたびたびだった。唯一の楽しみは作法の茶道の稽古で、菓子は無いので校庭できれいな石をみつけてきて、お茶はなくて形だけだったが、殺伐としてきたその時代に、女性の嗜みを忘れないようにとの先生方の配慮だったのだと思う。今、私は茶道を教えている。それは私の生甲斐になっている。

2年の秋から私たちも学徒動員になった。航空兵の栄養剤を作る仕事だった。ビー玉くらいのを包装し300ずつカンに入れ、口をハンダで密封した。空襲で学校の周りがやられ、工場と共に長野に疎開することになった。白馬のスキー場で、100畳の大広間で80人程の女学生が生活した。梓川のそばの小学校の工場での作業で、工場を建てるための材木運びの力仕事で、やっと工場が動き出すことになったら、終戦

だった。あの苦労はなんだったのだろうと、一種の虚無感におそわれた。あのとき沢山運ばれた材料の砂糖とミルク等いつの間にか消えてなくなっていた。私たちは、終戦と同時に国の保護が無くなり、白馬の山の中に無一物で放り出された。ラジオも新聞もなく、原子爆弾のことや日本中が空襲でやられたことを聞かされて、涙、涙で、泣くばかりだった。封筒一杯の焼き米をもらって、切符の手に入ったものから、帰るしかなかった。私は東京の家が焼けてしまったので、母の実家、福島に帰った。帰る所があるということが、どれ程有難かったことか、いまでも時々思い出す。辛いことの多かった半年だったが、いざ去るとなると、美しいアルプスの山々、可愛い草花、鳥のさえざり、白樺のパラダイスと名付けた林の中で、歌を歌って励まし合ったことなど、いいことばかり思い出されて去り難かった。

戦後

私は女学校を卒業するとすぐ、小学校の臨時教員になった。戦争で若者が多く死んだので、どこでも先生が不足していた。その日出勤すると、職員室は無く、廊下で出席簿を渡され教室に案内された。3-1組、事前指導も何もないまま既に私は担任だった。こんなに驚いたことはない。子どもたちは、期待を籠めて私を見ている。私は深呼吸をして、天井を見て、さて如何したものか考えた。出席簿で名前を呼ぶと、実に元気な返事が返ってくる。私は嬉しくなった。名前を間違えて発音したら、違う違うと言って皆が笑った。とたんに緊張がほぐれて、和やかになった。

若くて不慣れなため、うまく子どもをまとめられず、辞めていく人もいても無理からぬことであった。私の受け持ちは3年の小さい生徒だったし、保護者たちが、若くて頼りない私でも、先生、先生と敬意を示してくれたことが良かったのだと思った。校舎は家畜小屋のようなバラックで、トタン屋根を夏の太陽が容赦なく照りつけたし、冬はすきまだらけの床から、冷たい風が吹きこんだ、

履物は半数が下駄で、上履きなんて持っている子は何人もいなかった。冬でも素足の子、手は黒く汚れてヒビ割れている子、ストウブで湧かした湯で洗ってクリームを塗ってやることも度々だった。風呂がないのである。冬は天突きたいそうで体を温めることができたが、夏の照りつけはどうしようもなく、7月は授業も半日になり、夏休みが待たれた。授業より、食べさせることが大事だった。コッペパン、脱脂粉乳、実沢山の汁物が多かった。アメリカの放出物資で、コンビーフや果物の缶詰が配給になることもあった。野菜を切って配膳、薪割り、なんでもやった。

ある日進駐軍の視察があるというので、教科書に墨塗りをした。そして、レッドページがあり、多くの活動家先生が学校から追放された。情熱的な良い先生が多かったので、子どもや親たちと泣く泣く別れて行った先生たち。これから日本は自由になるはずだったのに。あの輝いていた先生たちのことは、いつまでも忘れ難かった。学校は急に淋しくなり、赤は悪いと言う観念がなんとなく浸透していったような気がする。

教科書採択問題を皮切りに、勤務評定、学力テスト、産休制度、主任制。組合の活動家は、僻地に転勤させられたり、次々と日教組分断をはかる政策が打ち出されていた。君が代・日の丸問題は、機会があれば話し合いたい。組合がただ反対しているように思われているが、一般の人が解るように説明しなければ理解してもらえない。運動会や卒業式になると、校長先生が、国旗・君が代やってくださいと土下座して頼むのが、私はすごく厭だった。